An aerial photograph of a historic town, likely Dubrovnik, showing a dense cluster of buildings with red-tiled roofs. The town is built on a hillside, and the sea is visible in the background. The image is the background for the entire page.

世界遺産都市を歩く

第6回

意志 住み続けることの

市壁をもつ港町
ドウブロブニーク

写真1 プラツァ通りの東端より西を見る。かつては小島(左)と陸地(右)とを分かつ水道だったところである。

文・写真
西村幸夫
東大教授



アドリア海の北の海岸に降り立った蝶のような華麗な港町——私にはこのまちはそう見える。南にひらける海の内こうはイタリア、長靴のくるぶしあたりのところである。古くからローマ帝国、その後はベネツィア共和国の強い影響下にあったことがうなずける。

全長1940mの市壁が完璧に残っている都市は地中海沿岸でも珍しい。このアドリア海の真珠は、614年に海岸線を10kmほど東に下ったところにあつた、おそらくはかつてギリシアの植民都市だったエビダウルム（現在はツァヴァット Cavtat という小港町）が中央アジアから西下してきた遊牧民たちによって滅ぼさ

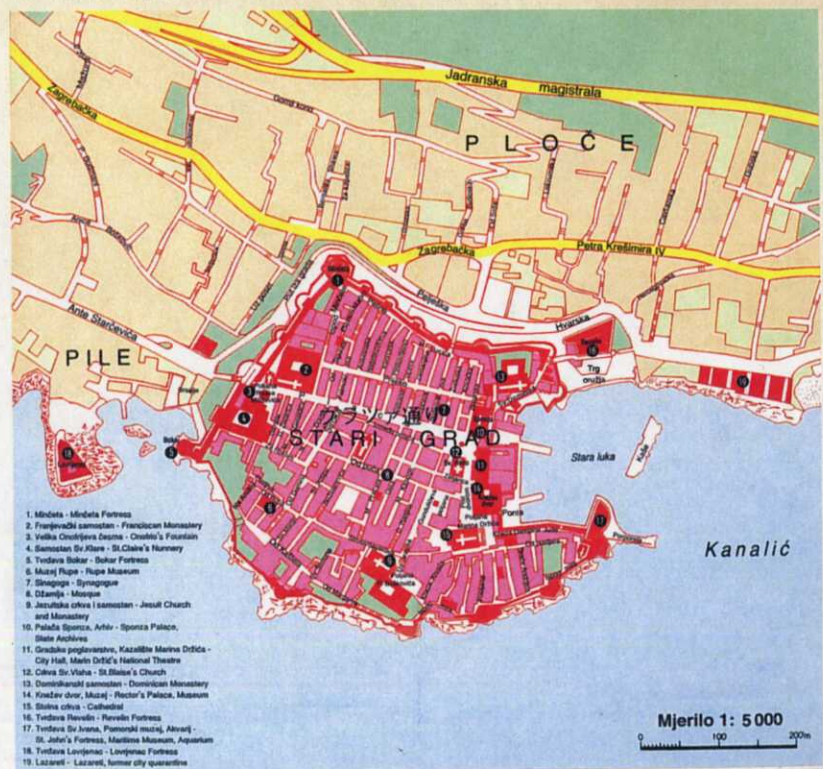


写真2 ドゥブロブニクの守護聖人である聖ブラシウスの日（2月3日）の祝祭でぎわうブラツァ通り（出典・参考文献）

い。そのうえに港の機能を併せ持っているのである。なぜこのようなま

ちが造られ、今日まで命脈を保ってきたのか。

図1 ドゥブロブニクの市街図、市壁の内部は当初の世界遺産地区である。のち、1994年に周辺部も世界遺産のコア地域に編入された。



れた際に移り住んだ住民によって拓かれたと考えられている。現在の市壁内の東南部の小高いあたりがかつては小島で、そこが避難民であるギリシア人やローマ人たちの居住地になつたようである。対岸の陸地側にはそれ以前からスラヴ人が住んでい

た。以降、水道両側の集落は埋め立てを繰り返しつつ次第に拡大し、11世紀終わり頃にはついに陸続きになつた。そしてその名残が現在の目抜き通り、東西に走るブラツァ通りである。都市は13世紀には現在の形をなし、経済的にも地中海の重要な拠

写真3 市壁の上から見たブラツァ通り（西より）。

点都市となつていった。

ドゥブロブニクの市内の中央や北を東西に貫通しているブラツァ通りはこの都市を貫通する唯一の通りであり（写真1）、またもつとも幅員の広い文字通り都市の基軸である。そしてここは祝祭の舞台でもある（写真2）。

不思議なことにこの通りは東から西に行くにつれて次第に幅員が小さくなっている。港から上陸した旅人はスポンザ宮殿前の広場に立つて、西に向かって延びているブラツァ通りを眺め、パースベクタイプが強調されたドラマチックなその街路風景に魅了されたことだろう。

古代からの歴史を持った都市がその中心部にこのような明快で大規模な軸線を持っているのはいかにも不思議であるが、この通りがかつてアドリア海に抜ける水道であったと考えると合点がいく。そこはまた北側と南側の急な斜面が落ち合うところでもある。ブラツ

ァ通りを蝶の胴体と考えると、両側の斜面はさながら華麗な蝶の羽根である。

ブラツァ通りを境に北側と南側とで街路パターンが明らかに違ふところも、さらにはもつとも古いと考えられる東南隅から南部にかけてがより有機的な細街路網から成っているところも、その意味するところはよく分かる。重層する歴史がそのまま街路のパターンとして空間を構成しているのである。

もうひとつ不思議なことは、これだけの歴史都市でありながら、ブラツァ通り沿いの建物がじつに平明で均質なことである。裏通りの迷路とは対照的だ。

これにももちろん理由がある。ドゥブロブニクは1667年に起きた大地震によって大きな被害を受けた。復興の過程で中世的なブラツァ通り（もともとはギリシア語およびラテン語で Platea、道路を意味している）は見事に改変され、バロックのファサードの町並み、高さや壁面線の揃った街路空間が生まれたのである。通り両側

